

## 教育・学修支援に求められる資質・能力と専門性に関する探索的研究

○米田奈穂\* ○御手洗明佳\* ○岡田聡志\* 白川優治\* 木下直\*\* 竹内比呂也\*

(\*:千葉大学 \*\*:東京大学・非会員)

※本研究は、千葉大学アカデミック・リンク・センターの「教育関係共同利用拠点（教職員の組織的な研修等の共同利用拠点《教育・学修支援専門職養成》）」としての活動の一部である。

## 発表の構成

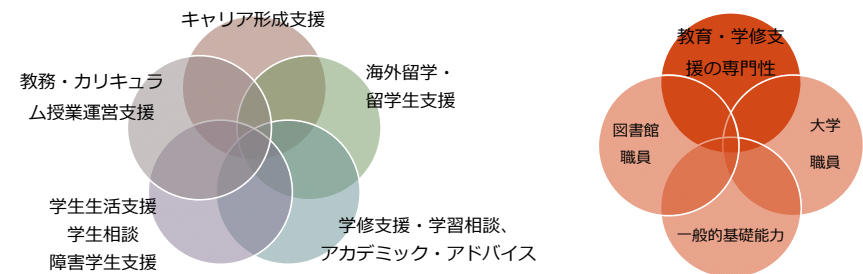
- 課題設定（米田）
  - 資質・能力、専門性を捉える枠組み、本研究の構成
- 文献調査（御手洗）
  - 系統抽出基準、先行研究で言及された資質・能力
- アンケート調査（岡田）
  - 因子分析結果、構成概念妥当性の検討
- まとめ（岡田）

## 課題設定

- 2014年2月：中教審大学分科会『大学のガバナンス改革の推進について』（審議のまとめ）
  - 「教務」「学生支援」に精通した「高度専門職」の設置に言及。
  - SDの義務化へ
- 2010年12月：科学技術・学術審議会学術分科会『大学図書館の整備について』（審議のまとめ）
  - 大学図書館の「学習支援」「教育への関与」の専門性に言及。
  - 国公立大学図書館協力委員会（2015）の議論。

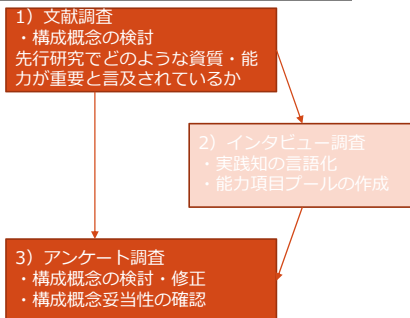
教育・学修支援には、  
具体的にどのような資質・能力が求められているのか？

## 資質・能力、専門性を捉える枠組み



## 本研究の構成

- 関連する資質・能力を網羅的に捉える。
- 尺度研究のアプローチ方法をベースに、方法論的頑健性を担保する。
- 3つの調査から構成。
  - 本報告では2つの調査結果を報告。
    - ・ 文献調査の結果
    - ・ アンケート調査の結果



5

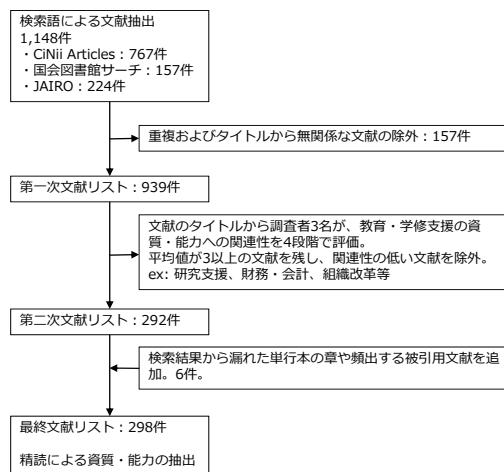
## 文献調査

- ACPA & NASPA (2015) やCAS (2015) をベースとしつつ、和文献（書籍・論文・雑誌記事等）に焦点を当て収集。
  - 使用DB：「CiNii Articles」「国会図書館サーチ」「JAIRO」
  - 抽出範囲：2000年～2015年まで
  - 検索語：関連語の組み合わせによる14パターンを検索



- 方法はDavis et al.(2006) などのシステムティック・レビューの方法を参照。

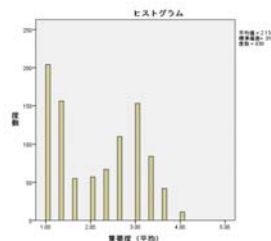
6



### 文献の系統抽出

#### ■ 関連性の評価

- (内容妥当性の確認方法に準拠)
- ・ 4: 内容を必ず確認する必要がある。
  - ・ 3: 内容を確認することが望ましい。
  - ・ 2: 内容を確認する必要が低い。
  - ・ 1: 内容を確認する必要はない。



7

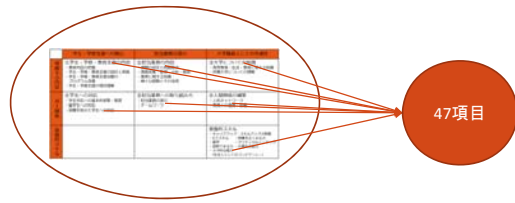
## 文献調査結果

- 298件の最終文献リストの精読による資質・能力の抽出
  - 適切な研究のアプローチが採られている文献は限られる。
  - 経験論や記述に根拠がないものが多いが、それを含む。
  - 資質・能力に言及のない実践事例等は除外。
  - 384件の資質・能力・行動特性を抽出。
  - KJ法で分類を行い、8領域35項目に整理。
    - ① 高等教育、教育学等の知識、② 自大学の知識・理解
    - ③ 支援の構築・改善、④ 情報の収集・分析・報告・発信
    - ⑤ 対人関係能力、⑥ 自己開発の姿勢、
    - ⑦ ICTスキル・語学、⑧ 一般的な基盤的能力

8

# アンケート調査の設計

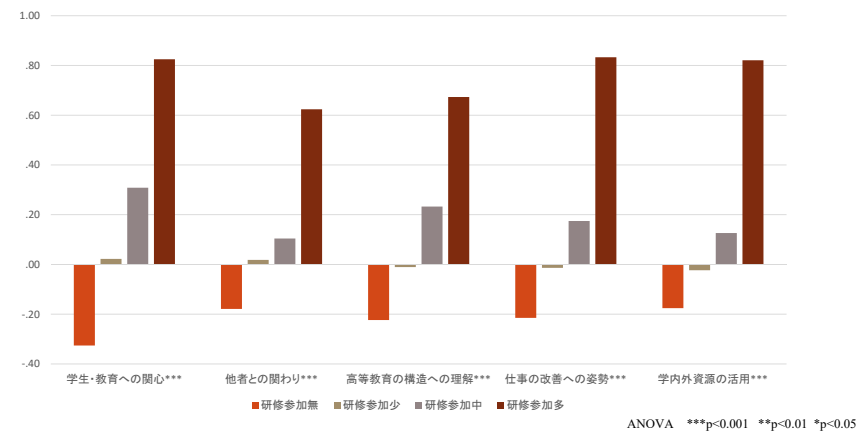
- 目的：教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力を明らかにする。
- 対象：国公立10大学（調査協力に基づく）
- 調査時期：2016年3月
- 方法：匿名Web調査方式
- 回収数：712件
- 教育・学修支援に関連する資質・能力を測定する47項目
  - 2つの反転項目を含む。
  - 文献調査、インタビュー調査の結果から項目を選択。



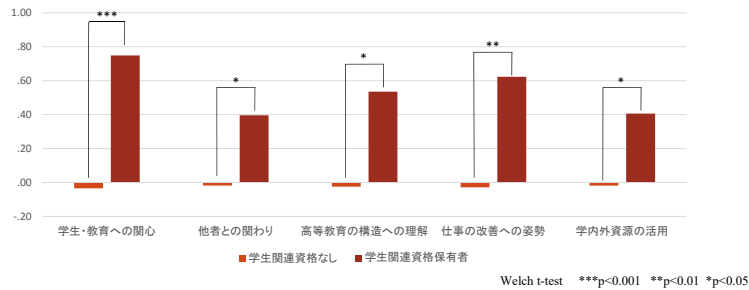
- 分析対象：事務補佐員等を除く専任事務職員502名（回収率：20.7%）
  - 最終的な分析ケースは501ケース
- 項目分析結果（反転項目2項目を除く45項目）
  - 天井・床効果の確認 → 天井効果が認められた2項目を削除
  - 項目間相関 → 1項目確認されたが、内容を確認し、保留。
  - I-T相関 → 0.26~0.64 著しく低い項目は確認されない。
  - Cronbachの $\alpha$ 係数 → いずれも0.94以上
  - G-P分析 → 上位/下位集団の各項目の平均値に有意差を確認。
- 因子分析結果
  - 43項目について探索的因子分析（最尤法、Promax回転）
  - ガットマン基準、因子負荷量0.35以上の項目を採用。
  - 複数の因子に対して重複した負荷を示した項目は除外し、分析を繰り返す。
  - 最終的に5因子30項目を採用。

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
(1) 様々な教育方法に関心がある。	.831	-.062	-.007	-.064	.012
(9) 学生の学習や発達についての専門的な知識に関心がある。	.800	-.013	.070	-.080	-.120
(3) 現代の学生、若年者を含くも課題や問題状況に関心がある。	.755	.116	-.146	.010	-.018
(5) 学生のメンタルヘルスに関する知識に関心がある。	.745	.059	-.053	-.025	-.083
(4) 様々な学生の家庭環境や家族関係が多様であることを理解しようとしている。	.690	.181	-.094	-.081	-.029
(18) 留学生への支援のあり方に関心がある。	.657	-.049	-.099	.045	.104
(17) 障害をもつ学生へ支援のあり方に関心がある。	.656	.008	-.062	.102	.026
(13) 仕事や学修の両立について関心がある。	.621	-.103	.279	.038	.026
(6) 学生が参加できる学内外の学習機会を把握している。	.617	-.075	-.115	-.032	.061
(7) カリキュラムマネジメントについて関心がある。	.617	-.057	-.183	.013	.007
(10) 学内の教育環境・設備を把握している。	.460	.023	-.150	-.001	.057
(27) 相手の立場で考えようとする意識を持っている。	-.047	.837	.043	-.029	-.139
(26) 相手の話を丁寧に聞く。	.014	.793	.092	-.165	-.028
(11) 話し方やしぐさや雰囲気を感じ取っている。	-.095	.559	-.027	-.083	.184
(23) 相手の特徴や個性に合わせた対応をする。	.007	.454	-.022	.150	.030
(28) 教員との信頼を築いている。	.148	.452	.065	-.165	-.061
(10) チームワークが得意である。	-.025	.439	.019	.014	.267
(2) 困った人を助けて声を掛ける。	.200	.423	-.045	.071	.120
(14) 学校教育法や大学設置基準等の関連法規を理解している。	.000	.094	.867	-.042	-.026
(15) 高等教育の制度や歴史を理解している。	.169	-.060	.718	-.016	.083
(12) 文部科学省や中央教育審議会等の政策文書を読んでいる。	-.010	.057	.707	.025	.021
(1) 新しい企画・提案をする。	.000	-.135	-.004	.843	.006
(5) リーダーシップを発揮する。	-.195	.105	-.119	.766	-.048
(6) 自分の業務の進め方を絶えず見直している。	.060	.227	-.096	.507	-.019
(7) 自分の業務の進め方に対する意味や役割を意識している。	.089	.145	-.035	.406	.041
(4) IT等の新しいツール/ロジックに対応する。	-.155	-.090	-.071	.375	.101
(13) 知識とコミュニケーションを積極的に持っている。	-.069	.105	.072	-.059	.789
(12) 学内の他部署の仕事に関心を持っている。	-.029	.137	-.074	-.068	.681
(14) 他大学の教職員と交流する。	-.067	-.099	-.136	.164	.466
(8) 自分から進んで研修に参加する。	.194	-.025	-.051	.184	.432
因子間相関					
因子1		.466	-.542	.489	.510
因子2			.146	.558	.568
因子3				.467	.369
因子4					.621
因子5					

- 「学生・教育への関心」因子 ( $\alpha = 0.82$ )
- 「他者との関わり」因子 ( $\alpha = 0.84$ )
- 「高等教育の構造への理解」因子 ( $\alpha = 0.86$ )
- 「仕事の改善への姿勢」因子 ( $\alpha = 0.80$ )
- 「学内外資源の活用」因子 ( $\alpha = 0.80$ )



ANOVA \*\*\*p<0.001 \*\*p<0.01 \*p<0.05



- 研修参加の頻度や学生関連資格の保有においても有意差が確認される。  
→ 学習経験に反応する尺度といえる。

14

## 考察・まとめ

- 構成概念妥当性の検討
  - 探索的因子分析による5因子30項目を抽出。
    - 概ね文献調査・インタビュー調査の想定に近い概念構成
    - 対人関係・業務系スキルは同一因子化する傾向
  - すべての因子において、研修参加の多い群、学生関連資格の有資格者の得点が高い。
    - 自己評価尺度としては有効性が確認される。
- 特徴：研究アプローチに基づく資質・能力の析出
- 課題：客観的な資質・能力の評価との関連性を検証する必要性  
：確認的アプローチによる知見の検証

15

## 参考文献一覧

- ACPA & NASPA, 2015, Professional Competency Area for Student Affairs Educators, [http://www.naspa.org/images/uploads/main/ACPA\\_NASPA\\_Professional\\_Competencies\\_.pdf](http://www.naspa.org/images/uploads/main/ACPA_NASPA_Professional_Competencies_.pdf) (2016年6月2日最終閲覧)
- CAS (Council for the Advancement of Standards in Higher Education), 2015, CAS Professional Standards for Higher Education, 9th Edition.
  - Academic Advising Programs
  - Master's Level Student Affairs Professional Preparation Programs
- Davis, D., Mazmanian, P., Fordis, M., Van Harrison, R., Thorpe, K. and Perrier, L. (2006). Accuracy of Physician Self-assessment Compared With Observed Measures of Competence: A Systematic Review. *JAMA*, 296(9), p.1094.
- 国公立大学図書館協力委員会研修のあり方に関するワーキンググループ、2015、大学図書館職員専門性と専門研修のあり方について（報告書）  
<http://www.janul.jp/> (2016年6月2日最終閲覧)
- 特定非営利活動法人実務能力認定機構、2014、大学マネジメント・業務スキル基準表 スキル項目説明書、<http://www.acpa.jp/kijun/management.php> (2016年6月2日最終閲覧)
- Young, D. and Dean, L. (2015). Validation of Subject Areas of CAS Professional Studies Standards for Master's Level Student Affairs Professional Preparation Programs. *Journal of College Student Development*, 56(4), pp.386-391.

16